View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Miyagi Gakuin Women's University Repository

宮城学院女子大学発達科学研究
2015. 15. 63-75

第１回公開講演会

アメリカにおける子どもたちと動物の関わり

～グリーンチムニーズでの取組と効果～

～農福連携国際セミナー「子どもたちが動物から学ぶこと」基調講演より[注1)]～

講師　木下美也子 氏
（グリーンチムニーズ＆ファーム　サム＆マイラ・ロス研究所教育プログラム部長）

皆さんこんにちは。どうもいろいろとご迷惑をおかけしましてカウフマンが日本に来られないということになりましたので、今日は、私が代わってお話し致します。どうぞよろしくお願いします。先に始める前に、カウフマンの方からビデオメッセージの方が来ていますので、流してもらってそれにかぶせてお話の方をしたいと思います。

「皆さんブルースターから挨拶を申し上げます。台風も過ぎてお天気の方も良くなったのではないでしょうか。今日はとても素晴らしい斬新な企画ということで参加を大変楽しみにしておりましたが、行けなくなりまして本当に申し訳ありません。本日の講演は、私の同僚である木下さんと二人で作りました。その講演を始める前にグリーンチムニーズで行われている大事な活動について、私の方から少し皆さんに直接お話をしたいと思います。67年間グリーンチムニーズでは、子どもたちの養育と農業を一体化して農業が教育で占める重要性を大切にした子どもの教育をしてきました。グリーンチムニーズの子どもたちは食べ物がどこから来るのか、野菜はどうやって育てるのか、ハチミツはどこから来るのか、ミツバチをどうやって育てるのか、メープルシロップをどうやって作るのか、ということをみんな体で学んでいます。都会で育ち自然に囲まれて成長できない子どもたちが多くなりました。私たちの命を支える土や地球というものとのコネクションが失われていると思います。そういう中で、ファームベース教育、グリーン・ケアといったことが、現在、子ども達に欠かせないものとして、人間にとって大事なものと国際的に言われるようになりました。本日、私

たちはとても良い機会を与えられたのだと思います。行政・NPO・農業関係者・教育者たちが、一つになることによって世界・社会をより強くすること、私たちが依存している、そして理解しなければならない環境への理解や感謝の気持ちをもった子どもたちを育てることが私たちの重要な使命だと思います。そして、こういった分野にすでに興味があり、情熱を持っている人だと思いますので、皆さんに頑張っていただきたいと思っています。皆さんが有意義な一日を過ごせますように心からお祈りします。また、ぜひ次の機会があれば参加させていただくことを祈っております。将来またいつか出会うことが出来ることを楽しみにしています。」

それでは、ここから本題に入りたいと思います。よろしくお願いします。では、次のページをお願いします。皆様の中には、グリーンチムニーズについて聞いた方もいるとは思いますけれども、簡単に、施設についてお話しを先にしておこうと思います。グリーンチムニーズというのは、あくまで寄宿制治療施設なのですね。子どもたちで、先

ほど足立先生から紹介があった障がいがある子どもたちを社会に戻すための教育・支援をする、そういう施設です。その中には寄宿できる子ども達があり、また特別支援学校があり、学校に家から来る子ども達もいます。家庭で生活できている子どもたちは基本的に家から通う、障がいのために家庭で生活をするのが困難な子ども達が寮生活をするということになっています。現在約200人強の子どもがいまして、半分は寮生活、半分は家から通ってきているとなります。始まったのは1947年、小さな3歳から5歳までの子どもたちを対象にする幼稚園、寄宿の幼稚園という所から始まりました。社会福祉局などの要請により社会福祉の施設になったのですが、現在では学校の教育者の方と連携をする施設になっております。始まった当初から、ファームがあるということは農業があり、動物たちを飼うということを初めからの目標としていましたが、現在との大きな違いは、昔は子ども達と一緒に動物を育てて、その動物たちは自給自足という考え方だったのですね。ただ、障がいのある子どもたち、感情やトラウマを受けた子ども達と生活し始めたところで、セラピーを担っているセラピストの動物たちを食べてしまうといことがどうしても難しくなりましたので、そういうことは一切やめて200〜300頭近い動物たちが一生幸せに生活できることになりました。

その中で最近なのですが動物、植物、野生といったことを全部一つにしまして、ネーチャーベース・プログラム、すなわち自然に基づいたプログラムと呼んで取組を行っております。今日の一番大事なところは、皆さんたぶん、やっている症例や活動例を見たいと思うのですが、その前に簡単にいくつか今ある哲学を紹介したいと思います。ミリューセラピーというのは、ドイツのナチスのあの体験をした人ブルーノベッテルハイムが創り出した理論ですけれども、ナチスの収容所キャンプにいた時にひどい仕打ちを受けて、監視とかからひどいいじめを受けた人たちは、嫌な人になってこういう所に来ても虐めるということに彼は気づいたのですね。それから、環境とか他の人たちが人間に与える影響というものを考えまして、自分が関われている環境よって家庭は変わるということで、それを逆にプラスにすると人間は優しい環境に置くと、自然と優しくなるのではないか、というような考え方だと思っていただければよいと思っています。ですから、子どもたちはグリーンチムニーズに来ると、動物だけではなくてスタッフ今600人以上いますけれど、みんなが毎日朝しっかり声をかける、誰かが泣いていたり、心配していたりするとみんなが大丈夫、どうしたの？と声をかけます。そういったお互いをすごく大事にする、動物も人間もみんなここの施設の一員として尊重される、そういう風な考えでやっております。グリーン・ケアというのは、今ヨーロッパの方で出ている哲学なのですが、グリーンな環境ですね、緑に関わるありとあらゆるものを取り入れましてそういうことをセラピーに使ったり、教育に使ったりすることで、子どもたちの学力が伸びる、またセラピーが進むそういうことをいろいろなデータを出しながらやっています。興味がある方は最後にメールアドレスを載せていますのでご連絡ください。英語でよければたくさん資料がありますのでお送りします[注2)]。

野外活動というのは、野外で行われる、何でもよいのですけれども基本は体で学ぶ、体を動かして勉強するということだと思うのですね。よく皆さんご存知の写真から見ると、フィールドアスレチックのような感じに見えると思うのですが、それよりももっと意図的にいろいろと問題を作って、その問題をグループで解決していくとか、怖いものを克服していく、そういったことをしていくアドベンチャー教育。それから、野生の動物観察、ハイキングやバードウォッチングですね。そういう自然の中で勉強すること、その中で植物を観察したり、池に行って池の中の動物たちを観察したりすることを取り入れてやっています。理科だとか生物環境学なども心を育てるのと、あと教育を伸ばす両方ができることをやっているところがメリットとして大きいと思います。

次に、エコ心理学です。地球と自然と人間が感

情的に繋がると、人間の心が癒されるという自然と人間のリレーションシップという大きなものですね。俗に私たちの仕事場ですと、ヒューマン・アニマルリレーションシップ、ヒューマンアニマル・ボンドと言われていますけれども、それ以上に「自然をすべて取り入れるそういった形で自然が心に良いんだ」、「自然と心の繋がりが出来た人間はほかの人間と繋がりができるんだ」、そういう考え方でエコ心理学を取り入れています。

最後になるのですが、次がバイオフィリアと言いまして人間というのは生理的に本能的に自然に魅かれるものであるといったそういう理論ですね。そしてこれは、どうして動物なのかという答えの一部になると思います。私たち人間は本能的に動物に反応する好奇心があったりだとか好きだったり癒されたりそういうことがある。そういうことを利用して、自然とか動物を取り入れると今まで苦手だった勉強だとか、セラピーが進むそういう考え方だと思います。ただ、バイオフィリアはたまになんですけれども、よくない反応をする人たちもいます。全ての人に自然が良い、人間にとって自然や動物が有効かというと、そうではなくて、やっぱり駄目な人もいまして、バイオフィリアは必ずしも好きなことだけではなくて、逆の影響を与える場合も加えているものだと思います。

ちょっと難しい話になってしまったので、ここからはグリーンチムニーズの子ども達についてもう少しお話ししたいと思います。まず、活動とかのお話をする前に少しいくつか話しておかなければいけないことだとは思うので、グリーンチムニーズの子ども達はさっき足立先生からご説明があった、アスペルガー・高機能自閉症の子ども達が65%になりました。私が初めて行った時1997年は自閉症の子どもたちは一人もいませんでした。それはどういうことかというと、現在、学校で対応が難しい子どもたちの問題が変わってきて、当時は暴力とか、情緒障がいと言われたりとか、行動に問題がある子どもたちが一般的だったのが、今、学校で対応が難しい子どもの中で、アスペルガーとか高機能自閉症とかそういった子ども達が増えてきているということになります。それ以外に、多動とか注意力のない子どもたちですね、そういった子どももたくさんいまして、先ほど、足立先生からもおっしゃっていましたようにほとんどの子ども達、少なくても2つ以上、ひどい子どもになると5つから6つ以上症状を持っている子ども達がほとんどです。PTSDになるのはもちろん、命にかかわるような災害を受けた子どもも多いのですが、私たちのところに来る子どもたちが特にトラウマになっていることは、学校で今までいじめられたりだとか、仲間はずれにされたりだとか、いろいろなところで怒られたりして、「自分がだめな人間なんだ」とか、「勉強ができない」とかそういうことが多いんですね。そういうトラウマっていうのは小さな事かも知れないのですけど、やっぱり、不登校に繋がったりですとか、怖くて不安症で学校にいけない子どもがかなり多くいます。ということで、私たちのグリーンチムニーズでは心にトラウマがある子どもたちというのは100%と考えています。そして同時に、子どもたちに関わる大人たちも何らかの形で過去にそのようなトラウマがあったのではないかということで、「みんなお互いにトラウマを持った人たちに接するように優しくゆっくり無理をしないで接しましょう」というように考えています。したがって、子どもたちの間では、毎日学校で、それから寮に帰った時に皆でお話会をして「今日は大丈夫？どんな気持ち？」と聞きまして、その後、「今日の目標、今日は何をしたいのか？」そして、「それに対して誰が助けてくれるのか？」そういうことをみんなでシェアをしています。シェアすることによって、子どもたちお互いが「今日はだれだれ君に助けてほしいんだ」ということからお互いに頼るということ、それから、自分たちが感情というものに抑揚をつけて分かるようになること、そういうことを勉強します。

もちろんグリーンチムニーズの子どもたちがどうして来るかというと、たくさんの理由がありますね。いろいろな子どもたちがおりますが、グリーンチムニーズに送られてくる理由っていうの

は、何かあった時の癇癪だとか、行動が危険で普通の学校では対応ができないということなんですね。蹴る、殴る、かむ、あと逃げたりだとか、走ったりだとかするとそういう風な行動自体が普通の学校で面倒見きれない理由になっています。また、すごくいじわるで、嫌でわざとそのような行動をするわけではないのですが、何かコントロールを失った時に自分を傷つけたり他の人を傷つけたりなどの行動をすることもグリーンチムニーズに来る理由になっています。

そういう理由でだいたい精神病院に2回ぐらい入ったことがあるそういう子が多く、それと同じようにさっきお話ししましたように学習障がいですとか、あと感覚障がい、臭いがダメとか音に敏感だとかというふうな子どもたちが多いです。私たちが今、動物が有効な理由の一つというのは体を使って勉強できるということと、五感を使って勉強できる、そういったことだと思うんですね。障がいがある子どもたち特に、座って勉強が苦手な子どもがたくさんいます。読んだり、書いたりの勉強が出来ないとか、あと、聞くだけでは勉強ができない、そういう子どもたちがどんどん体を使ったり言葉で読めないのならば、目で見るとか、目で見るのが苦手な人は臭いを嗅ぐ、触るそういったことが出来るのが動物とか農業を使っているそういうものの利点だと思います。これが、向こうで出ているリサーチの結果ですけれども、Learningピラミッドと言いまして、人間が勉強をするのに最も有効な物、知識の維持というものが出ています。例えば、講義を聞いている場合というのは、覚えている可能性っていうのはすごく低いんですね。それと比べると、実際に自分でやってみた場合には、75%くらいの確率に上がっていきまして、他の人にも教えるっていうことをすると自分で学んだ知識を消化して、それをもう一度組み立てて出さなきゃいけない、それをすると90%くらい勉強が出来るというこのようなデータが出ているのですね。

ファームでどういうことをするかというと触って勉強しますよね。やってみる、体温を測って、そこで体温について学ぶとか、聴診器を使って心拍数を聞いてみる、実際に練習する。それから、動物の観察とかそういうことからディスカッションをよくするんですね。自分たちで話し合うということが多い。それから、実演をしながら実際に練習することが出来るということと、年齢の高い子どもが年齢の低い子どもだとか、あとは外から来る普通の公立学校の子どもたちに動物についての勉強や教育について教えます。教えることで勉強をするということがとても大事だと思うので、私たちの中で積極的に取り入れている再現学習です。少しおもしろいなと思ったので、日本の文部省が出している体験教育調査例を調べたところ、自然に触れる体験をしたあと、勉強に対してやる気が出る子どもが増えるのは、特に一番上の小学生だとだいぶ多いんですね。やっぱり自然に触れると、やる気が出る子が圧倒的に多いということが体験教育の良いところなのではないかということで調査結果が出ました。これは、同じ文部省から出ていたもので、「自然体験の多い子どもの中には道徳観・正義感のある子どもが多い」というので、子どもたちが、良い判断が出来たりだとか、ほかの人達にやさしくなるそういった道徳観が育つ人が多いというデータも出ています。

では、そういったことを含めてグリーンチムニーズの取組、効果、活動例を見ていきたいと思うのですが、私たちのところでやっていることを、たぶん皆さんも聞いたことがある言葉で説明します。一つ目は動物介在療法。アメリカでは動物介在療法AATというものは、免許を持った医療関係者がすることになりますので、お医者さん・看護師さん向こうではソーシャルワーカー・心理士・作業療法士・理学療法士そういった人たちが行う何か目標がある活動ですね。そこに、「目標を達成するために動物たちが貢献する」、そういう活動になります。次に動物介在活動なのですが、今は、アニマル・アシステッド・アクティビティ、とその中に動物介在教育アニマル・アシステッド・エデュケーションと言われることも多くなりました。動物たちが参加をする活動、あるいは教

育ですね。特に医学的な目標はありませんけれど、教育的目標で癒しを求める、そういうことになります。動物と同じように植物介在教育というものもありまして、それは一般的に動物と同じように使われています。グリーンチムニーズではこういうことをどうやって取り入れているかというと、これに学校の授業を上乗せすると大変なのですね。時間もないし、そういった時間がないので。学校の授業の一環として、音楽の授業に行くようにファームの時間とか、乗馬の時間に行く。そして、野生動物の教室と植物の教室があります。学校の授業の一環ということで、それらを教えるのはライセンスを持った教師です。学校で教えていること理科だとか算数あるいは英語ですよね、そのあたりを取り入れて教えているということで、精神的な面だけではなくて、教育上の学力の向上について成果をあげています。グリーンチムニーズに来る子どもたちは、特別支援教育が必要な子どもと指定されています。また、学校で障がいのある子どもと認定されています。その学習の上で障がいのある子どもと認定されるには、学年が2つ、2年遅れなければダメですね。アメリカでは。学年が2年遅れないと、障がいがあっても授業についていっているのであれば、普通教育。体に異常がなければ普通教育となりますので、2年以上遅れている子どもたち、そういう子どもたちにファームで触れ合いをさせるためには、学力も上げなければいけないということになっています。あと、環境、放課後のクラブだとか夜もいろいろやっていまして、動物が子どもたちと触れ合う時間っていうのは、朝7時から夜8時くらいまでになっています。活動についてなんですけれど、いろいろと出ている文献の中で、動物介在活動が有効な部分だと出ているところがありまして、それを5つに分けました。それを1つずつ見ていきまして、ここからは例を出していきたいと思います。

まず1つ目は、動物とのリレーションを通して感情とか信頼関係を作ることです。その利点は、リレーションというのは動物と人間の繋がりなんですけれども、そこから優しい人が作られることです。動物は人間を偏見を持って見るということがないんですね。障がいがあっていじめられた子どもたちでも、動物たちと最初から真っ白な状態で関係を作っていける、信頼関係が出来てきます。そういう動物との信頼関係が出来てくると、動物について教えてくれる人間の先生と信頼関係を築くことができる。そして、人間を一人信用できるようになると、他の人も信用できるようになる。そういうふうなやり方を考えております。

もう一つは、情け・同情心です。やっぱり自閉症の子どもは、他の人の感情を理解するのが難しい。同情心というのがなかなか育たない。他の人の感情が分からないから、自分のやりたいことだけやって、他の人には興味がないということが多いのですが、そういう子どもたちには特に動物で、そういうことを築いていくということがあります。たとえば、この羊なんですけれども、私たちのところにいる羊の中で一番年寄りで、16歳です。16年生きるというのは、なかなかないお年寄りなんですね。今どうしているかというと、他の動物たちの倍くらい餌がいる。一日4食くらい食べるんですよ。他の動物は2食ですが、4食。しかもぽんっと遠くに置くと見えないので、人がいるところで食べます。また、白内障になってきたので、目が見えにくく、目の治療だとか、そういうことをいろいろしなければいけないんですね。子ども達が年老いた羊について勉強して、世話をすることから、今度はうちの先生が、自分のおじいさんおばあさんの話をします。また、死期が近いということで、普段から「この羊は何年生きられるのだろう」とかそういう話をします。そして、「死ぬことになったらどうなるのか」、いつ動物は安楽死をさせるとか、そういう決断をしなければいけないのか。そいうこともまとめて、動物に対する優しさだとか、年老いた羊を世話することによって、高齢者の方にどのような対応をしたらよいか、そういうことまでやっていきます。今はまだ大丈夫なのですが、足がちょっと弱くなってきて歩けなくなる可能性があるのと、冬は向こうは厳しいで、この年の冬が越せるかまたちょっとわ

からないところで、そのあたりを特に年上の子ども達には、いろいろ討論をしてもらって、勉強してもらっているところです。

スライドの右下なんですが、これは、エミューの赤ちゃんなんですね。小さい鳥で、成長するとダチョウより少し小さいぐらいになるのですが、この生まれたばっかりの鳥の世話をすることで、生まれたばかりの命の大切さも勉強しています。特にうちのファームでは、親が亡くなった子ども達の動物を扱うことが多いです。ヤギとかでも、お母さんが一頭の面倒をみない、そこでリジェクトされた子どもを哺乳瓶で育てました。また、このエミューのお母さんとお父さんは何匹か生まれたのですけれども、一匹には興味がなくて、放っておかれた子を育てました。自分たちもつらい思いをした子ども達もいます。弱いものを大切にするというのはどういうことなのか、というところから教えます。自宅に小さいお子さんがいる場合、特に小さな赤ちゃんとかを落としたりとか、蹴ったりとかで傷を負わせたり怪我を負わせることがあります。そういうことから、どういう風に動物を扱ったらよいのか。絶対に抱えたり、持ち上げたりはしない。あと、追って走ったりはしない。そういうことが、特に多動の子どもにとってはとっても大事で、一方大変なことなんですね。動物のためだから、何かあった時に走らずにちょっと止まって考えられる。そういうところから、子ども達にそういうスキルを教えていっています。

それから、これは蜜蜂ですね。蜜蜂ってお世話をするのが怖いと思いませんか。子ども達が蜂の世話をするというのは、蜂蜜が採れてとっても楽しいのですが、怖いんですよね。ここでは、特にスタッフの人たちとの信頼関係を作ります。スタッフの人のことを信頼できないと子どもたちは立たないです。立たなければ無理強いはできないので、スタッフの人と理解を深めて、そこからスタッフを信頼できるから、「やってみよう」、「一度やったら楽しかったからまたやってみたい」、そのようなことをやっているのが、蜜蜂の飼育を生かせる例です。また、蜜蜂っていうのは、皆さんご存知でしょうけれども、刺してしまったら死んじゃうんですよね。そういうこともあって、どういうときに蜜蜂は刺すのか、どういう風にすれば、刺さないでいてもらえるのかとか、そういうことを勉強したりだとか、自分自身のコントロールも覚えてもらいます。

子どもたちが癇癪を起したりとか、暴力をふるうときっていうのはどういう時かというと、自分自身で制御がきかないときなんですね。「コントロールができない」、「もうだめだ」、「どうしたらよいか分からない」というときが、そういう事になります。私たちもそうだと思うんですよね。イライラして、どうしようもなくて、爆発しますよね。その爆発しないように表現力を変える、それ以外の表現力を学ぶっていうのがコントロールできない子が学ぶ大きな目標です。自分の気持ちを理解して、自分が今イライラしているんだとわかると、じゃあ、イライラしているけれどもどうしたらよいか。「僕は散歩に行きたい」、「音楽を聴きたい」とかそういうこと少しずつ教えていくようになります。感情をコントロールが出来ると、子どもたちは自然に穏やかになっていきます。また、同時にコントロール出来るようになるっていうのは、自分に自信が出来ること、自尊心の発達、それから独立性に重要な関係があるんですね。たとえば、子どもたちが馬屋に行った時に、他の人たちを探し回って、「僕の好きな馬はどこにいるの？」って聞くことができれば、独立心が出来て、安心できて、イライラしないんですよね。でも、分からないし、聞く人もいないし、どうしたらいいんだとなると爆発をしてしまう。独立心を育てることと、自尊心を育てることは一緒だと考えています。

それから、不安の削減なのですが、ご存知ですよね、自然とか動物が不安を下げるということがあります。歯医者さんの水槽のお話をご存知ですか。歯医者さんで、そこに水槽で魚が飼われているところでは、人間の心拍数とかドキドキといったものが半減するんですよ。「安心する、水槽を見ているだけでちょっとほっとする、ストレスが

減る」ということが今データで出ていますので、そういうことから自然や動物のいる環境で不安を下げると、感情のコントロール力が上がってくるということで、子どもたちの安定を目指します。たとえば、ここのスライドの女の人なんですが、うちのセミナーに来ました。蛇が怖くて、どうしても触るのが嫌で、部屋に行くのも嫌だったんですね。でも、蛇が嫌いなのは理由があったのではなくて、ただ苦手というだけで部屋の片隅に立って、他の人が蛇と触れ合うのをしばらく見ていました。見ているところから少しずつやりたいという興味が出てきて、自分の感情が作り直されて不安が減って、最終的に自分の肩に蛇をのせることができました。セミナーの最後に話していました。「すごく楽しかった、自分に自信が持てた、できた」、それが私たちが子ども達にやってほしいことの一つなんです。それと今度は横の写真ですが、羊の移動です。羊を移動させるとき、羊は20頭ぐらいいるので、一匹一匹綱をつけていくわけにはいかないのです。実は先頭に餌を持ってバケツを鳴らしながら歩く人がいて、羊が全部その人を追っかけていってその後ろから迷子が出ないように、他の子ども達が追っていく、そうやって移動をします。これは、感情のコントロールがすごい大事なんですね。前を行く人って楽しそうなんで、やっぱりバケツを振って走りたいのですけど、走ると危ないんです。みんなあっちこっち行っちゃうし、スピードが上がるとだめなので、先頭はゆっくり行かなければいけない、そういう人と、あとは、羊が20頭全部自分の方に向かって一気に来ると怖い子もいるんですよね。そういうことで、理解してゆっくり行って、後ろから行く子ども達も走らない。走ると羊は逃げるので、ゆっくりそっとグループをまとめて移動させる。子どもの本能心っていうのは何か走るものをみると追っかけたいとか、面白いものがあったら走っていきたいというものなんですが、そういうことをしないで動物の行動を勉強して、羊の行動について理解をして、それでどういうことをしたら良いのか考えるってことから、自分たちのコントロールっていうことをやります。20頭の羊を大移動させた後には、「自尊心が少し増えてきた」、「すごい僕がやったんだ」そういう気持ちが出てきます。

最後にこれなんですけれども、一年に一回地域でやっている発表会に行って他の子ども達と競争で動物の発表会をするんですね。自分の動物が決まって、その動物について勉強して審判の人の前で動物を見せて、自分たちの知っている体の部分とか動物の使い方とかそういうものを見せます。最終的に順番がつくんですね、一等賞・二等賞とかつくんですね。一般的には、こういう障がいを持った子には勝ち負けをさせると良くないということがあります。負けるとかわいそうだし、負けるのが苦手な子どもとかがたくさんいて、負けると癇癪が起こるのでダメだという人が多いのですが、自分たちの感情のコントロールが出来るようになると、子ども達にはチャレンジとしてこれをやってもらいます。負けても、勝った人の肩を叩いて「君はすごい。素晴らしかったね」、といえるような人間にならないと、やっぱり、社会適応はできないと思うんですよ。そういうことから、あえてリスクというものを理解したうえで、やってみる。もちろん負けた子どもたちへのサポートは、ソーシャルワーカーの人や心理学の人がみんなスタンバイしているので、オッケーなんですね。そういう、環境でやらせてあげるというのを特に、年長になってくる子どもたちには教えています。

次は教育学習です。数学、英語、理科、社会いろんなことをやっています。向こうでは今、政府で決まっている学習規程がすごく大変ですね。テストを受けて、いろいろなものに合格していかなければ大学に行けないというプレッシャーが、やはり、子ども達にかかっています。いろいろな学習を体験からやっていくということで、スライドの一番上の写真ですけれど、卵を鶏のところから毎日とってくる担当の子どもたちがいます。とってきた卵は必ず秤ではかるんですね。重さによって大きさが決まるんですよね。MとかLとかありますよね。それぞれに分けて、うちのカントリーストアがありましてそこでの販売になります。卵

をきれいに洗って、日付を付けて、サイズに分けて、後ろに並んでいるカートに入れる、そこまで子どもたちの学習になっています。

また、今、去年からニューヨーク州で新しいプロジェクトが始まりまして、大学を卒業しても、実際に就職するときになって、就労に必要な技術ですとか就労に必要な知識を持っていない子どもが増えているということが分かりました。その結果を受けて、全州で「就労スキル」というものを子ども達に教育するというプロジェクトが出来まして、どこの学校でもしないといけなくなりました。特に、うちには大学に行けない子ども達がかなりいるので、大変なことになるのですが、たとえば、「何か技術を付ける」ということで、子どもたちに14歳を過ぎると、芝刈り機とかトラクターの運転なんかを教えています。自分たちでできるようになれば、それで仕事を探せるということ、タイムカードを付けたりだとか、仕事をすると「今日は行きたくない」とか「今日は遅れていくんだ」とかじゃなくって、時間通りに毎回決まった時間に行くってことを学びます。それと関連して、今、野菜を作って売っている子どもたちがいますけれども、野菜のサイズを計ったり、お客様が来た時にどういった応対をするかを勉強したり、あとお金のやり取りについても学びます。そこから、ファームのキッチンに行ってクッキングをやったりだとか、現在では自動車運転の教習も始めました。

その他、学習と関連することとしては、本を読まない子、大嫌いな子が多いのですが、日本でもありますよね。図書館とかで本を読ませようとかありますけれども、ファームがあるので、「犬・羊に本を読もう」という企画をやっています。自分で読みたい本を選んで、自分が一番好きな動物のところに行って本を読み聞かせる子が出てきました。そういうことが出来てくると、自分の好きな動物の話を書いてあげるとか、動物にお手紙を書いたりとか、そういうことをする子も増えました。勉強もやりたいと思えばできると思うので、やりたいと思える環境を作ることが大切だと思います。子どもたちが好きだとか、楽しいとか思える環境を作って、そこで勉強してもらうということをすごく重視しています。たとえば皆さんでもあると思いますが、音楽が好きな人は音楽の勉強をいくらしても苦にならないじゃないですか。自分が好きなものがあるとそれについて勉強したりリサーチしたりすることは人間全く苦にならないんですね。でも、自分の興味のないことだと本当にできないので、好きなことを見つけて、その好きなことのために勉強したいという意欲を作る、それが大事なことです。

次は、体と健康についてです。自閉症の子ども達によくいるんですけれども、自分の体がどこにあるか分からない子どもが結構いるんですね。自分がやっていることや、自分のスペースがわからないから、たとえば、人との距離が極端に短い子とか、人との距離が極端に長い子がいます。そういうのも、教えていかないと変な人とみられたりだとか、不自然な人と見られることがたくさん重なってきた子どもたちがいます。人の目を見て話が出来ないとかそういうこともありますよね。そういうことで、体について教えるというのは作業療法士がずっとやっています。また、手先が器用ではない子もたくさんいます。手が器用じゃない子どもは鉛筆が上手に握れないとか、箸がちゃんと使えないとか、フォークがちゃんと使えないとかいうのが結構あって、すると書くのが嫌いになる子とかいるのですね。ちゃんと字が書けないから書くのが嫌いな子とか、自分でボタンがかけられないとか、ファスナーが上げられないという子が多いんです。そういうことが出来るようにしていくということもやっています。

健康に関わる衛生のことですが、歯磨きとかシャワーとかが大嫌いな子、できない子がたくさんいるんですね。自閉症の子どもは特に、シャワーの感覚が嫌い、水がかかるのを嫌う、音がダメということがありますね。そういうことで、歯を磨いたり、シャワーを浴びたりすることが癇癪の原因になる子が必ずいます。それ以外で今増えてきたのは、小さな時からおむつがとれていない

子どもです。11歳、12歳になっても、トイレに自分でいけなくて、大きなパンツ(オムツ)を履いてくる子がいるんですね。そういう子ども達に健康とか衛生について教えるそういうことは大事だと思います。特に、トイレットトレーニングができない子は他の子にいじめられますし、やっぱり生活が普通にできないというのがあります。

次に、自閉症の子どもには、バランスとかリズムを取ることが苦手な子がいますね。バランスとかリズムって、運動とかで必要なだけではなくって、日常生活ですごく必要なことなので、でもやらせると嫌な子が結構いるんですよ。そこで、それを動物とか自然でやっていく。あとは、多動の子に多いのですが、多動の子って重たいものを持たせたり、ひざに置くと、自然に重心が下がって10分から15分くらい落ち着いていられるということを、作業療法士の人が言っているんですね。多動の子どもは座って勉強する15分くらい前に、ファームに連れてきて掃除をしてもらいます。しばらく一輪車で重いものを引いて、体を動かして教室に帰ると、10分程度座っていられるということがあります。また、干し草を掃除してもらうのですが、上手くバランスを取ったり、相手の体との位置関係をしっかり分かっていないと危ないので、そういうことを含めて作業療法士の人たちが教えています。これは、私の飼っている犬なんですが作業療法士の人のところに行って歯磨きをします。歯磨きが嫌いな子どもたちに歯磨きを教えるために、彼女は一週間に最低、3回か4回ぐらい歯磨きをしてもらっています。よくお風呂にも入れてもらい、洗ってもらっています。あとは、ボール投げが出来ないバランスの悪い子は、ボール投げをしてキャッチしたりとかそういうことで、やらなきゃいけないことが苦にならない、そういうトレーニングをやっています。この写真ですが、馬のことはあまりご存じないと思いますけれども、馬は乗るだけじゃなくて引けるんですよね。これは、基本的には馬車をひく用の用具をつけていますが、後ろから人間が歩いて行って馬を動かすことが出来ます。これをすると、馬という大きなものが前にいて大きなトラックを運転するような感覚です。曲がり角を曲がる角度とか、曲がるのに必要な間とか空間とかを考えないと、コーナーを曲がれなかったりだとかするんです。こういう馬車引きなどは、子ども達に空間移動、体の意識について教えるだとか、自分の目と手の協応などについて教えることになります。

最後は、理解・知識のところなんですけれども、これはちょっと詳しい話になると長いので簡単に説明したいと思いす。これは、日本語に訳す時に一番難しかったことで、私にもよく説明が出来るか分からないのですが、概念の理解というのは、たとえば、生とか死とかっていうのは、子どもたちにとってはとっても難しい概念なんですね。これは、馬が亡くなった時に私たちが実際に作ったメモリアルです。ここに千羽鶴とかがありますよね。そういうものを子どもたちが持ってきました。この壁にある物も少し見えるかと思いますが、子どもたちから馬へのお手紙もたくさん貼りました。動物の死はつらいことなんですが、そこから生きていたことを感謝するとか、生きていた良い思い出に変えていくことを学びます。死というのは自然なものであって、すごく怖いものではないし、誰か人がいなくなった時には、その人のいろいろな思い出とかをたくさん考えて、幸せな気持ちになれるようになるんだよ、ということでやっています。

次は、この写真ですけれども、これは、馬の形をしたマスクなんです。真ん中から二つ分かれていて、馬っていうのは両方の目で違う視野っていうのがあって、それを両方とも頭の中で見ているわけですね。私たちは視線が一つになりますけれども、馬は違います。このマスクをすると、子どもたちは馬がどういう風に物が見えるかというのが分かります。馬の見えない部分の死角っていうのも、これでわかったりするんですね。馬の気持ちになって歩いてみると、「どうして馬っていうのは時々びっくりするのか」とか、「なんであんな行動するんだろう」、そういう疑問点が理解できると思うんです。それが出来ますと、馬に対す

る同情心とか理解が出来ますので、そういうことを特にやったりしています。特にこれは安全にもとても大事なことで、子どもたちが馬の安全を守るために自分がしなければいけない事っていうのを考える一環教育としてやっています。

ここからは、私たちスタッフのお話になるんですけれど、こういう動物の安全とか福祉を守ってこういうことをやっていくために私たちは何をすればよいのか、そのお話です。動物の知性、感情についての理解というのは意外と知らない人が多いですね。650人いるスタッフの中でファームのスタッフは14人だけです。それ以外620人以上の人たちは動物の専門家ではありません。そういう人たちに、「動物たちっていうのは気持ちがあるんですよ」ということから教えます。すごく大事なことだと思います。たとえば、今データで出ていますけれど、ぬいぐるみと本当の動物とのセラピーの違いというのは明らかなんですね。本当の動物の方が有効である。どうしてかっていうと、動物は生きていて反応があるからなんですよね。そうなると、逆に動物たちを道具として使ってはいけないとなると思うんです。動物を、道具として使うのであればぬいぐるみにしてください。気持ちがあって感情があるから、動物を尊重して必ず安全を守ってあげなければいけない。自分がどうしたいというときにも、動物がダメだったら諦めるとかというようなことも理解できることが重要です。

次に、適性なんですけれども、セラピーにはどういう動物がいいですかってよく聞かれるんですが、適性というのは動物の種類にもよりますし、トレーニングにもよるし、一人一人の性格にもよるものだと思います。そういうことを見極めるスタッフが必要だと思うので、いろいろとやっています。たとえば、夜行性の動物というのはセラピーにはあまり向きません。夜行性の動物は使いません。昼間寝ているところを使って、それでひっかかれたり、噛まれたりすることが多いのですね。特に、ハムスターは小さいこと、引っ掻いて逃げられることが多いこと、落としたりすることが多いこと、また私たちのところでは特に多動な子どもたちが多いことなどを考慮して、うちの動物としては適性ではないと考えています。あるいは、サルの場合は、人間にうつる病気をたくさん持っていること、危険な部分とか予測できない行動をすることが多いので、サルは使わないというルールがあります。

また、クライアントと動物の問題ですが、子どもは癇癪を起すと逃げる、追いかける、掴む場合があるので、動物によっても小さな動物、大きな動物、逃げてくれる動物、逃げてくれない動物とか、その場その場で判断をします。たとえば、羊なんかだと何か嫌なことがあると走って逃げてくれるので大丈夫だったり、逆にヤギは興味津々で寄ってくるのでそういう時には守り切れないことがあったりするんですね。小さな動物より大きな動物の方が人間から傷つけられることが少ないこともあります。特に、動物はストレスとかも多いので、こういうふうに昼寝を出来るところをつくってあげるとか、動物のストレスについてもいろいろ考えています。

では、ここで一つ、カウフマンから「言いにくいことを言って来い！！」のスライドです。いろいろな所で行われるアニマルセラピーとよく言われているものの写真をたくさん集めたものです。良い・悪い賛否両論があると思うので、紹介だけ、いろいろ言われていることを説明したいと思います。イルカなんですけれども、イルカはセラピーで、好まれている方が多いのですが、それと同時に動物愛護団体からは、野生のイルカにこうやって餌付けをしてしまうと良くないとか、イルカのストレスの問題とか、いろいろな声が上がっています。皆さんにそういうことを知っておいていただきたいということだけですので、良いとか悪いとかではないのですが、すごく上手にされている所もあるし、問題のある所もあるようです。ウサギなんですが、ウサギは基本的に地面に足がついていると安心するんですね。なので、これは、とても良い例だと思います。ウサギを床に置いたままで本を読んだりするということで、ウサギが

ひっかいたりだとか、噛んだりとかそういうことを妨げる、そういうことになっています。野生動物をセラピーに取り入れるということも賛否両論で、これは鹿なのですが、いろいろと問題点があったりだとか、野生動物でも人間に馴らされて人間がいるところで生活せざるを得ないこともありますので、そのあたりをよく考えなければいけないところだとは思います。乗馬はもちろん賛否両論で、去年私たちの所で大きな学会をやったところ、動物愛護の方がきて、馬に乗っている子どもたちを見て、あなたたちは「毎日、馬に乗馬してもいいと聞いている？」、「馬に許可もらってる？」と言われました。そのように、乗馬は一切ダメという方もいますので、そのあたりは私たちは自分たちの概念とか信念とかを持ってやっています。

これらは子どもたちが動物とキスをしている写真ですが、私たちのところでは動物とキスをすることは禁止になっています。一つは衛生的に危ないというか、病気になったり、あるいは体が弱い子どもなんかには病気が移ったりするということがあるんです。それ以外に、動物は本能的に人間にこれだけ近づかれることっていうのは不自然なんですよね。犬にかまれたりとか、猫にひっかかれたりだとかということが起こってきたりすることが結構あったりだとか、馬の場合には、うちのボランティアの人で鼻の骨を折った人がいるんですよ、馬が頭を上げた時に。そういうことが危ないことから、うちでは禁止です。ただ、それは皆さんがプロとして判断することなので、そういうことがあることを知ってください。また、この写真なんですけれども、実は馬が使っているハミ(馬の口に含ませる主に金属製の棒状の道具)はすごくきついやつで、こんなハミだと馬って乗られると結構痛い思いをすることがあるんですね。そういうこととかもやっぱりあると思います。あとは、レスキューされた動物なんですけれども、レスキューされた動物が必ずしもこういう生活に向いているわけではなくって、人間に虐待をされた動物の中には子どもと生活をするのが苦手な動物もいます。ですので、私たちがレスキューをするときには、とっても気を付けているということと、レスキューの動物って言うのは怖いとか人間のトラウマが見えた時点で、他の所に、静かな所にお預かりをしてもらうようにしています。

最後ですが、介助犬なんですが、介助犬の寿命は普通の犬よりストレスの関係で3年短いというデータが出ています。また、動物愛護の方からは賛否両論、動物じゃなくても出来るんじゃないかという人もいます。私たちは特にどちらが良いという意見はありませんけれども、意見があることも知ったうえで活動をしていくことになります。スタッフのトレーニングについて、だいぶお話したので簡単にいきたいと思います。うちのインターン生なのですが、子どもたちの触れ合う前にスタッフトレーニング時間、合計145時間です。それだけ時間をかけてやっていきます。また、スタッフの人の理解というのはとても大切なものでありまして、スタッフの人からの批判というのもファームではよく受けるんですね。ファームにいれば子どもは元気だし、機嫌もよくしているし、本当に大変なことはよく分からないじゃないかとか、テレビとか取材を受けるのはファームばっかりで、自分たちはすごい苦しい事をしているのにという人がいたりとかありました。また、金銭面でスタッフにボーナスが出ないのに1億5000万円以上もかけてファームをやっているというのはどういうことだというスタッフの方もいました。そういうことで、スタッフの人への理解や不安、トレーニングというのはとても大事だと思います。また、動物はかわいい柔らかい、だからいいんじゃないという人もたくさんいるので、そのあたりの教育というのはずっとやっていきます。

最後になりますけれども、私たちのベストプラクティスというやり方を実践しています。ベストプラクティスというのは資格とか基準とかを最低限守らなくちゃいけないということで、それにパスするだけのプログラムだけではなくて、全米のどこに出してもファームは胸を張って出していけるという考え方です。例えば、私たちの障がい児

乗馬については、PATHっていう所の基準では馬は一日6時間以下しか乗馬させてはいけない、3時間以下しか続けて乗馬させてはいけないというルールがあります。グリーンチムニーズでは、馬は一日2時間以上は仕事をしないですし、続けて騎乗も45分くらいしかしません。うちの馬たちの年齢とかストレスのレベルを考えてこの基準では不十分ということで自分たちの基準をまた別につくっています。また、ライバルとみなされる施設にこういうことを教えてはいけないという人もいますが、目標は、子どもたちが良くなることなのでそのために動物を取り入れるところがあれば、どこでもよいので、「どうぞ見に来てください、使ってください、」そういう考え方をしています。ベストプラクティスという意味で、本当にこの仕事はプログラムが広がっていくことを目標にしている、そのためにお金をつくることが目標ではないという考え方でやっています。

最後、これなんですけれども個人的な意見があって、モンシロチョウのお話をしたいと思います。日本ではモンシロチョウは蝶々の歌があってみんな知っていて、とってもかわいがっているじゃないですか。アメリカに行くと、モンシロチョウは蝶々ともいわれてなくて、蛾って言われるんです。キャベツの蛾って言われて、害虫で駆除削除されて全く愛されていないんです。そういった文化の違いで私は結構ショックだったのですが、そういうことはいろいろあると思うのです。特に辛いようなことも写真に出しました。象牙を取るために象がアフリカで殺される。よくやられていますけれども、すごい他人事ですよね。私たちにすると。だからそんなの酷いじゃんとか言いながら象牙のお箸を使っている人がいたりだとか、そういうことには目を向けたくない人もたくさんいると思うんです。逆に私たちが文化・伝統としてすごく大切にしているクジラの事があります。クジラが好きで、捕鯨というのは私たちの伝統で尊敬をしながらやっているのですけれども、知らない海外の人からはすごいバッシングを受けたりします。そういうふうなことがあって動物の愛護問題って言うのは、知らない人がメディアだけを見ただけであおられて判断することが多かったりとか、経済状況とか伝統というものがわからずに、見ている人が多いと思うのです。たとえば、左下の写真なんですけれども、犬が家の外の小屋にいるというのはとっても自然な関係だったと思うんですね。でも他の文化の地域に行くと、あれは虐待だと言われたりするんですよね。そういうことで、分からないのに話をする人だとか、そういう人がいることを私たちプロとして知っていなければいけないことだと思います。

象の問題の背景は、アフリカはすごく貧しくて、自分たちの命を危険にさらしてもこういうことをしないと生活が出来ない人というのがたくさんいます。今、動物愛護の一環として、こういう人たちが動物を殺さなくても生活できる環境を創ろうとするプロジェクトなどがあります。そういうことがあるので、動物愛護の問題は、とってもとっても複雑です。かわいいお洋服をつけて犬を散歩させることが普通のところもあれば、あれは犬の気持ちはどうなんだという人もいます。そういうことを知っておく。それが大事なんじゃないでしょうか。

まとめになりますが、この写真、とってもかわいいと思う方も多くいらっしゃると思うのですが、今年のアメリカの動物の愛護週間で、犬が噛むことのガイドプロジェクションとして作られたポスターです。女の子の耳が後ろにありますよね。耳が後ろにあるというのは、動物が威嚇しているときの意味で、じっと見ているあの目、目線というのもじっと目を見られると犬は怖いです。眉が寄っているというのも怖いということと、あと、むっとした口って言うのも犬にとっては威嚇なんですよ。この犬も耳が後ろに行って不安そうな顔をしていますよね。かわいい写真に見えるのですが、これは犬にかまれる一歩前なので、こういう教育をうちの子どもたちにもキャンペーンでやりました。動物をよく知って勉強していくと優しい人にもなれるし、動物愛護にもつながるという意味でご紹介させていただきました。私は代役で来

ましたので、いたらないこともたくさんあったかと思いますけれども、私のお話を聞いていただきありがとうございました。

注

注1) 本講演は、2014年7月13日、仙台合同庁舎で実施された「農福連携国際セミナー」(仙台市・東北農政局・宮城学院女子大学発達科学研究所共催)で実施されたものです。ご講演は、当初、グリーンチムニーズ＆ファーム　サム＆マイラ・ロス研究所所長マイケル・カウフマン氏が実施予定でしたが、ご都合により来日できず、同研究所・教育プログラム部長の木下美也子氏がご講演されました。講演の前後において、蔵王酪農センターマネージャー笠原新一氏、東北大学大学院教授・仙台市動物愛護協議会会長佐藤衆介氏、東北農政局経営・事業支部長山口琢磨氏、宮城学院女子大学教授 ・発達科学研究所長足立智昭によるパネルディスカッションが行われましたが、紙面の都合上、割愛させていただきます。また、このパネルディスカッションを含め、セミナー全体のコーディネートをされた帝京科学大学准教授・精神科医師横山章光氏には、深く感謝申し上げます。加えて、このセミナーは、宮城県、(公社)仙台市獣医師会からもご後援をいただいておりますことを付記致します。

注2) マイケル・カウフマン先生、木下美也子先生のご連絡先は以下のとおりです：
カウフマン先生mkaufmann@greenchimneys.org、
木下先生mkinoshita@greenchimneys.org、
グリーンチムニーズwww.greenchimneys.org。